

軍縮・平和重視の姿勢 これからも 日本人の活躍 もっと伝えてほしい

◎上智大教授

猪口邦子さん

——朝日新聞への感想をお願いします。

「小さい頃からずっと朝日新聞を読んでいますし、私の考えの形成に多大な影響を受けました。日本社会の思想の深化と教育・啓発に大きな役割を果たしたと思うし、戦後日本の軍縮平和の思想を深める責任を果たしてきた点は、とても立派だと思います。私も軍縮大使として活動する中で、朝日が軍縮を重視してくれたことは励みになりました。競争時代になればなるほど自分の履歴に基づく個性と強さを先鋭化していくべきで、朝日新聞は

ここが好き・嫌い 朝日新聞

連載
40

こうした分野を重点的にカバーしてほしいと思います」

——紙面はどんな風に読みますか。

「まず、1面でメジャーなニュースをチェックします。国際面はきちんと読むし、政治面も国内政治が大きく動いているときはよく読みます。ヘラルド朝日も購読しています。海外からコメントを求められる機会が多いのですが、海外メディアが日本について知りたい内容がヘラルド朝日にいち早く記されて届くので、とても便利です」

小さな萌芽を見のがさずに

——軍縮大使として活動していて、小さな記事でも反響があったようですね

「たった10行のベタ記事が載るか載らないか。その違いは、1面に出るか国際面に出るかの違いとは比べものにならないですよ。軍縮外交は多方面で変化の萌芽みたいなものから、小さく出てくるので、小さな記事でもいいから、そうした萌芽を伝えてほしい。確定的なことを伝えるのは通信社でもできます。しかし、朝日新聞は思考を深めるといふ役割を

担っているわけだし、それにはプロセスを伝えることが必要だと思います」

「他方、外交には非常に難しい部分がある。長いプロセスをかけるわけだし、手法もいろいろある。うまくいくこともあれば、長い間宙に浮いたままになることもある。そうしたものをすべて含めた深い知識を市民社会が共有できれば、外交に対する紋切り型の反応もなくなるだろうし、外交が深い成果を作ることも可能になる。大使在任中、『論座』にエッセイを書く機会を与えられたが、ニュースの報道だけではわからない、外交のビビッドなところを活写する機会に生かすことができ、ありがたかったです」

——新聞はすぐに理想論ばかり振り回すという指摘をする人もいますが……

「理想を追い求めるあまり、小さな成果を見落とすということがある。朝日の場合、その問題はあるかもしれませんが、外交の現場というのは、すべて理想に向けての小さな成功の連鎖であって、その連鎖のどこをしくじっても結果が失敗する。この緊張感は相当なものですよ。そういう緊張感の上に成り立っている外交というものを共有してもらえないかと思うんです。記者がプロセスを報道することに意義を感じれば、小さな成果も評価できるようにしたいと思います」

——「米国は一国主義だ」という見方は一面的だとおっしゃっていますが。

さんあるし、普通の熱意の読者がわかるように書く工夫も必要だと思う。経済は変化のスピードが速いので、記事を書くときもニュースの意味するものをひとこと付け加えてもいい。政治記事はそれを入れると判断が過ぎてしまうことになりませんが」

——高齢社会になって、新聞は活字を大きくしています。その一方で10行のベタ記事が載らなくなったり、細かいところまでわかりやすく書けなかったりという面も出ています。

「紙面も工夫次第ですよ。本当に論理を研ぎ澄ましているのか、無駄な文章があとこちに入っていないか。記事は精緻で知的な構築物でないといけない。記事の本数を少なくすることで高齢化時代に対応すべきではないと思います。記事の本数を少なくすると、軍縮に限らず萌芽的な分野のニュースは落ちてしまうし、問題発見的な新聞にならない」

——不満に感じた点はありますか。



いのぐち・くにこ 千葉県生まれ。米エール大学大学院修了。1981年から上智大助教授、90年から教授。2002年4月、外務省改革の目玉である民間人の大使登用第1弾として、ジュネーブの軍縮会議日本政府代表部大使に。2年間の任期を終え、4月上智大に復帰した。著書に吉野作造賞を受けた『戦争と平和』など。『戦略的平和思考—戦場から議場へ—』を今月出版。52歳。

「現場で感じたのは、日本がやる外交を記事にする欄がないことです。外交官に限らず、NGOの活動にもいえますね。政治面にときどき載るが、どうしても本省がこうやったという記事が中心で、現場の日本人が外交の舞台で活躍したというのが出てこない。外国人のやったことなら大きく載せるといふのは事大主義。とくにいまの学生たちは世界で活躍する日本というのが現実の姿として目の前にあるし、活躍する日本人を知りたがっています。若者に読まれる新聞にするためにも、そうした記事は必要だと思います」

座談会には必ず女性を

——女性として感じることはありますか。

「座談会の構成などで圧倒的に男性が多いですね。必ずしも男性の専門家しかいない分野でなくても男性ばかり出てくる。ほかの先進国では、それはポリテイカリーコレクトではない。高度に専門的な分野で男性識者しか集められない場合は、座長がオープンニングで「こういう理由で今回はこうなった」と相当弁明するんですよ。ところが日本の場合、男性しか出てこないことを疑うことすらしない。朝日だけの問題ではなく、日本の主要メディアが考えないといけない問題だけれど、女性にとって自分の意思を表明する場が確保しにくいと感じています」

(聞き手 社報編集長・桑原俊明)

「軍縮大使として米国と協議を続けて感じたのは、米国は自らを巨大なテロで被害を受けたスーパリー弱者だと理解していること、そして二度と悲劇を味わいたくない不安と孤立感の中で、誰にも頼らない独立した行動に走るということでした。だから、米国を多国間主義に引き戻すためには、米国の不安感に寄り添ってやる必要があるんです。私の大使としての活動は、全部米国が立場を変えてくれたから成功したんです。「二国主義」というのは紋切り型のとらえ方。もっと深いものがあるんじゃないかと思って取材してもらおうと、政策担当者にもヒントになるかもしれない」

年表や地図は役に立つ

——6月からミレアグループの監査役になられましたね。経済面はどう読みますか。

「保険関係の記事は全部読んでいます。やはり日経は踏み込みが深いですね。朝日の経済面はちょっとわかりにくい面があるけれど、大きなニュースがあったときに年表や地図、用語解説で知識を補ってくれて、だからきょうのニュースの意味合いがよくわかるというような作りになっていることは評価できる。私は講義のときに朝日新聞の年表や地図を活用しています」

「監査役になってグローバル化の先端的動きを初めて知ったのですが、普通の読者としてもわかったほうがいいことはたく